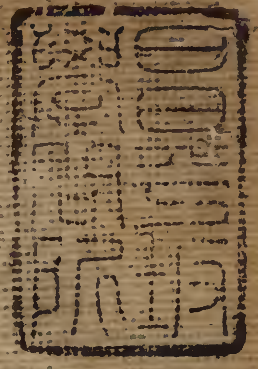


支本初可集光二十三

雜五



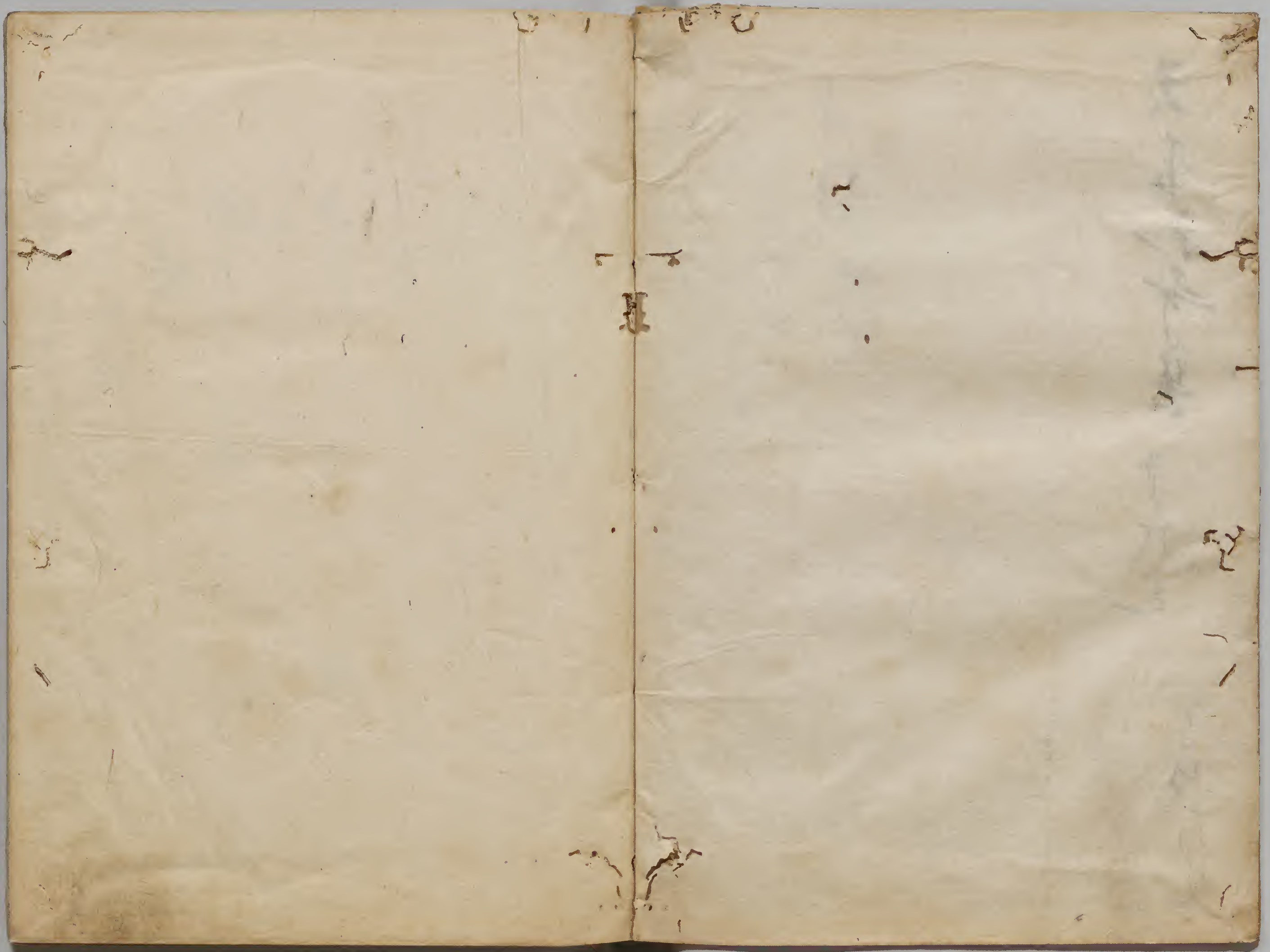
和書門類		二五五五號	一一二函	三六冊
------	--	-------	------	-----

內閣文庫		二五五五號	一一二函	三六冊
------	--	-------	------	-----

內閣文庫		番號	和 25555
冊數		36 ( 23 )	
函號		200	215 4











歌

通

公

運

家

流

撰書州

以作書作一草紙部卷一十四



支本和哥抄卷第廿二

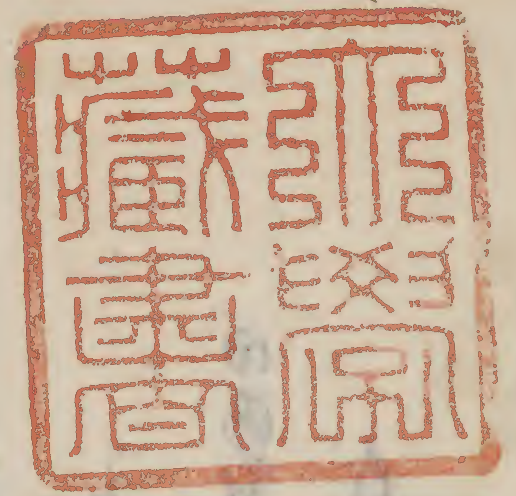
雜部五

題

真海

江湖

池鴻



淺草文庫



海

吉原歌詠新六

正三位知家

君の代はうこ井りらあさり海の  
釣うらまことみらとむるこ

日海新六

光俊卿下

色たよもあさりふる海あれ  
名の心さむくよそなま

日海新六

光俊卿下

り川の海あつむらりり海の

くきほあひいひとつるりり

千尋書入

小侍坊

よ川の海あつむらりり海の

あまのいのらもほくしん

保本元年後めいれい今迄法中教賢

うふしらのみえんくつしん

人あまのいのらもほくしん

新しんを代

人丸

夕されいらいあつむらりり海の



松きり色うわよいはらざるは  
中納言家持

浪よせしくまのまじり  
舟かきしきりわらわら

系らぎ下敷屏風よあはれ  
信實御下

みららる浪のこしらへたるは  
津守園春

舟かきしきりわらわら  
新羅島ののびるれうあはれ

きりぬきしきりわらわら

信実御下

いせの海よあはれ  
あはれ

日方  
日

いせの海よあはれ  
あはれ

作樂

いせの海よあはれ  
あはれ



波つらぬくらんあつて

源師光

いその海は渚と清くつる

の年の秋より天のくさ

日百代

小大君

いその海はあまのつらぬ

つらぬくらんあつて

建保二年八月廿二日

定家

いそ海はあまのつらぬ

つらぬくらんあつて

言指題

源師光

いその海はあまのつらぬ

つらぬくらんあつて

建保二年八月廿二日 源師光

いその海はあまのつらぬ

つらぬくらんあつて

源師光

いその海はあまのつらぬ



有明の月一書凡がゆく  
既あまよ

名よきわりの海はShang Tsung  
らえよくれぬ屋まよ語の

かまのたふ

かよひのさしり風は  
屋く

日  
お申納言為美

風あま一明ら海のみ妹まて

と物もあまよはなまの白浪  
述懐百  
後頼朝

あまの海とらうて  
あまも我あるりも

わがまの海とらうて

あまの海とらうて  
あまの海とらうて

あまの海とらうて  
清二位家隆

あまの海とらうて  
あまの海とらうて



海のほとけいひりあしる

弘安元年

後の系図

きりんのうきいりりそあまらん

ちあうくうまめうまれはりそま

比後百中ニ有月也 系儀為相

うさの原月をひこきる白波の

屋ものうまうてをいすしし

祇園社ろそ 皇太后文を後成

何なる流れてうまなれそ

うまのうまのうま 佛よりなり

らねる朝六

民アのお家

我袖のうまを成と津のまら

るうす 洞のつりなりなり

万そ

慈徳和尙

すま吉れ春の月よりあまら

ありのなりのうまのまをて

うまのうま

うまのうまのうまのうま



さるおのりつとんこわるわのぞ

建保元年四月下より文海難波流二位家隆

浪海鳴難波とつけて見海をい

波のりらるのあてなりなり

流海に入る実白流可きな難波 因の海 後京極持政

今いそそきこの海よりらるる

松葉よらる今朝の舟人

わすれぬ 光の筆も今持政

くらよるこの海よりらるる

ゆふけるこの海よりらるる

源仲正

悲しむこの海よりらるる

心ちるこの海よりらるる

子さし 為家

我が心よるこの海よりらるる

いこの海よりらるる

歌集 好忠

人この海よりらるる











ゆめゆめふはらふとせぬ白き  
千鳥あふりしそ 糸儀雅房

凡そくろむのしるすのしるす

まゆみちとゆめせるとあゆのしるす

名持実見後名水後名 如願法師

まよふふ波とあゆのゆめとより

おし井よふらあゆのしるす

の 後成女

鳥ふゆめゆめのはらむとせぬ白き

まゆみちとゆめせるとあゆのしるす

糸集絵よりしるすゆめゆめゆめゆめ 和泉武部

駒ふゆめゆめゆめゆめゆめゆめ

おし井よふらあゆのしるす

糸集絵よりしるす 白

まゆみちとゆめせるとあゆのしるす

おし井よふらあゆのしるす

康平六年十月五日 和泉武部 和泉武部

あゆみゆめゆめゆめゆめゆめ



公たつてあはれのこころ

日

しるすにたづねて

あまのついで

建保二年一月

日

のちのこころを

あまのついで

日

日

あまのついで

あまのついで

日

日

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで



あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心



白鷺の年と鳴社を海客の道知り

川の海やたふら浪られ物あは  
き流のうらやまのうらやま

伊豆玉と万石

よき人

川の海よら回乃波のあつた

さけるんりの残るれ志あは

そこのうらと相控

福倉者五石

玉らむとそこのうらとあは

うらとあは中よあは

鳴社をうら月

法眼慶結

玉連らこののたれんあは

あはとあはとあはとあは

あはとあはとあはとあは

後二位家澄

あはの海よあはとあはとあは

あはのあは風とあはとあは

あはとあは

澄親

目ツリやあはとあはとあは

あはとあはとあはとあは



五代経云

宣仁法師

君の代は波よらうとぬまの

物よまうとらうとぬまの

理は六陳好抄律

如家

らぬのうまの溪への山松塩こ

流のまうりそ枯月いあ

経

人丸

らぬのうまに溪へれ山松おあ

我悲まうら人のいあ

寛治元年四月屏風は通 西園寺入道政長

形くまうりけいあゆまのあ

らひろのうまのあまれを縄

歌集まうら

後二位如隆

永白のあゆのうまに打らう

あゆらうまよあゆらう

経

秋風はらうてあゆらうあゆ

あゆらうまうらうあゆらう



四方よりくるる常陸 月

大島のしりのうきよしりあう

いっぢりるんかののぼりかえん

遊集

光俊卿下

浪あらしりしりのうきあふかよ

海りのうきよきああきくわ

いそ川 康元二年十一月九日麻

崎社よりきく香取社よりあり

くきよき海のうきあふかよ

舟とくくして浪つるあわわわ

も風あらしりてなみしりあ

かきに風もあぬあもはきこ

くゆりれそ目も暮くくよ

びりてゆりき井てくよあ

くるよなしりにあつあつあ

——とよこ

天仁元年大嘗年合似記方屏風 といふと云ふ 中納言

よの海のあきしりしりあ



歌集

のころりんぬのくはくちりぬ

好忠

よこの海しきつゝあはれむし女

あ海のとも衣りつゝえん屋

日我え人ふ知恋

西行よ人

よこの海乃君をさうたのまあまの

あまをさうらぬあらのむしを

歌集

俊頼翁

よされうもよきりつゝあまの

りあもさうぬ恋もさう

○

好忠

よこの海乃らあまの浪もさう

うもあまのさうあまのさう

鴨也明

よあまのあまの入海もみわを

泉島さうさうあまのさう

○

○

浦嶋やまの浪もあまのさ







あしとあまの川今をなぐさる

中納言家持

さあさうらふよふとのぞのころ  
あひくふがまの梅よりさる  
むねむらうたれたき銭物て  
まじりて

鳴水鳥

平河内卿下

なごの海乃あまのあまの鳴水  
風よりいよむらうのこころ

墨金の入る指紋家百を海軍の為家

なごの海乃極下のこころ杖音  
はあうまぬらうのうら

東洋海軍

権僧正公朝

なごのうら極下のこころ杖音  
はあうまぬらうのうら

西の中央門

法橋殿昭

はあうまぬらうのうら  
なごのうら極下のこころ杖音







月よのきわる秋の夜作

よき人

けむの海はふいふありしうらあ  
みよけれく見ゆるあゆれ物

下記云布衣のあきと御年 大伴池

ありそれき紀よたまらるるを  
たまもくしよりいろよつら  
いりらえんてよさりらてうら  
とつあまの水うとしあす舟

小さぶらふぬさうらう  
の袖あちくーあともんく  
まうさゆもいねふりき紀花ら  
アとまうひさ小あーつむさうふ  
らうらあ

中納言家持

夕きれいてふりてうら川  
さよふさかふらにむらて我  
きらられいあ甲の凡さくし



吹るみるまにら白浪のま  
よこすまわいさくあ

百三十一 ありとく

うらせしるはちよひ  
あらしるまをのま

百三十二 意積和尙

とこのうたきまて  
浪の海はよそく

百三十三 清浦朝臣

とめの海はあすし  
本宮のあき夜え

百三十四 法橋顯昭

氷してはち清り  
あまのつるぬる

湖 雲をヨリ題知る誓

寛長元年女史の湖 光の果ては道接政

湖の海をこほらね  
千里よりまはるる







乾元二年仙田守人雜胡為菊

高瀬山ねこころれこころまの

入うこころしく波いりさよふ

家集永仁六年羅中訖を法眼交融

高師山あしこてられる浪人の

一こころとこころううれりう

野一こころと百一志賢 人丸

う浪やあつの大智もむし

じーのへー又あはる

百そち揚ふりり花妙あり

藤原の歌

よとくろ志賢れきう浪もくよ

思よえうけておろそあゆ

建保三年みおるそ妙聲 後二任家澄

志賢の海乃白ゆふ花の浪のよ

おろそあゆうう凡そあ

西河原よりそあ

後京極攝政

志の海乃袖あしと山あ

まのこころれこころまのあう



鳥一とて万て此鳥

あまのこゝろ

山風の海もける

はらすもあまのこゝろ

百そり湖海もるが

家澄

よのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろ

内集現ぬ六

衣笠因ら下

あまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろ

鳴

他がこしヨリ

鳥一とて万て此鳥

あまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろ

鳥一とて万て此鳥

中務痛乃後念

あまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろ

従ふ中明主よのわま

中原師光

あまのこゝろあまのこゝろ



いづれもくみよの代を久しき

家菜水邊納涼くし海 清猶印ト

河嶋の松の木陰の鳥居り

千世れよりい色のつねいふ

日懸りの 澄猪印也

川嶋の松の心をあけねい

ついでくかんそ年いふい

いづれも万いふい 人も

草枕旅りいといふい

いづれもあまていふい

宝治二年百そい鳥居 家申納涼定嗣

夫の代をいくあ代とすい

いづれもいふい

いづれもいふい 讀人

物々い定るい世残るい

いづれもいふい

家菜いづれもい 基後

白浪のいづれもい鳥居のい



人... 我...  
麻績王

之輝一の命を...

...の... 池...

... 人丸

...の... 舟...

...の... 舟...

... 家澄

...の... 池...

...の... 舟...

... 舟...

...の... 舟...

...の... 舟...

...の... 舟...

...の... 舟...

...の... 舟...

...の... 舟...

...の... 舟...



あまのついでにあまのついでに

歌集

後二位皇後

あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに

皇後二年あま

天皇御宇

あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに

皇

あまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに

皇

あまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに

皇後二年あまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでに

あまのついでに



あはれとて

流るるに

綿の流るるに

流るるに

夫あてて

流るるに

白き流るるに

ら研るるに

流るるに

流るるに

野流るるに

流るるに

流るるに

流るるに

流るるに

流るるに

流るるに

流るるに



ちのれ海へあはれ

小梅信

天の代をあふみの海をいそぐ  
くさのよさをとらひのよさをいそ

よき人

くららるあゆみのうすたはて  
漕ぐる舟のるよつちて

と集ありのと梅戸懐中勢

かひりてありれ海の秋凡よ

ちのれ海へあはれ

ちのれ海へあはれのうすたはて

くららるあゆみのうすたはて

漕ぐる舟のるよつちて

日

日

あはれ海へあはれ

くららるあゆみのうすたはて

あはれ海へあはれのうすたはて

あはれ海へあはれ



ふやうなりまをゆりりま

建保三年由嘉文八湖有家澄

とあり

あつらひし月ひかり

あつらひのさき

建保三年由嘉文八湖有家澄 原伸遠

あつらひの奥の

あつらひの海の

あつらひの海を

原伸遠

あつらひの奥の海を

あつらひの奥の海を

あつらひの奥の海を

あつらひの奥の海を

あつらひの奥の海を

あつらひの奥の海を

あつらひの奥の海を

建保三年由嘉文八湖有家澄 原伸遠

あつらひの奥の海を

あつらひの奥の海を







いそよそよのさき

いそよそよのさき いそよそよのさき 船周行

あーい のさき

えさのさき

信長

アツク

いそよそよ

いそよそよ

おほい

いそよそよ

いそよそよ

あつ

いそよそよ

いそよそよ

あつ

いそよそよ

いそよそよ

あつ



志海のまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ

あまのこゝろのまはりのあまのこゝろ



あまのつねにうらやまのしんせう海  
一海の崎のあまのつねに火  
日万七すのこゝろ  
中納言家持

しんせう海も朝むらさきしてこそあれ  
むらさきの海は月てあまのつね

昔の親王の御時あまのつね法師

しんせう海つらきしんせうあまのつね  
千年とまのつねのしんせうあまのつね  
信實のしんせうあまのつね

しんせう海も一しんせうあまのつね  
あまのつねのしんせうあまのつね

信實御下

あまのつねのしんせうあまのつね  
あまのつねのしんせうあまのつね

康元二年あまのつねのしんせうあまのつね

あまのつねのしんせうあまのつね  
あまのつねのしんせうあまのつね

日  
月



東なるものさわり行くらん  
こほりぬおろあやうき  
日らうま津奥

あまのや千島のささづき  
こほりのかこひふもされ

歌集恋 清浦翁下

八十崎のちし海はえさるいり  
公つよさこいささるいり

歌集恋 法橋殿昭

思ひと千島乃とくさつら  
えさるがよそね壺の石文

歌集松凡曉 松凡 神祇伯殿仲

あつらふやとささるいり  
衣さるいり

歌集 家隆

あちりさるいり松の梢より  
ささるいり

七永三年の月日松竹の歌集 藤原忠兼







況る六

夜並田下

かこの流たはるのまらりやまらりし

あふまのまらりあ海のつりま

文永三年甲子そまのゆひの流中折方の親王

山らよりんし<sup>まら</sup>んそぬたのね

あふまのまらりなまのゆひの海

あふまのまらりなまのゆひの海

流理太史顯孝

玉藻川の流れはまらり

妹のあふまのまらりなまのゆひの海

流

赤人

玉色川の流はまらり

あふまのまらりなまのゆひの海

まらりなまらりなまらりなまらりなまらり

あふまのまらりなまらりなまらり

あふまのまらりなまらりなまらり

十そあふまのまらりなまらりなまらり

あふまのまらりなまらりなまらり

あふまのまらりなまらりなまらり



家集恋文

家澄

あま夜ふれ大鳴りまゝ  
阿そととわやうふいぢん

同所 麻里市内 海防方

よみ人

けらちのこ乃ち鳴りくも

忍れい悲しき妹とねをてあ

建保三年名所そし秋鳴に伊又

家澄

夕なりのきくそいふもあはれ

破まの浦よ夜く

よみ人

よみ人

月よきのえと清き神

いうすれ浦しあはれい

秋鳴伊勢国

鴨長門

秋よやく秋鳴山は父よきて

凡のすゑりあまのりぢん

いそ伊勢記をあり法師

下み侍くる安頼山と云所

り人寄よとむいかなり



時海色落葉水

時海色落葉水

皇治二年 二位 丹后 後二位 丹后

吹く風のうらみ

夕浪のうらみ

武部 宇合

あつたあつた

あつたあつた

武部 宇合

秋のあつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた



嵐あはれはつゆはしらす  
さのつゆはつゆはつゆは

家集のつゆは

後頼朝下

あはれつゆはつゆはつゆは  
あはれつゆはつゆはつゆは

つゆはつゆはつゆはつゆは  
つゆはつゆはつゆはつゆは

あはれつゆはつゆはつゆは  
あはれつゆはつゆはつゆは

日百七

日

あはれつゆはつゆはつゆは  
あはれつゆはつゆはつゆは

家集のつゆは

後頼朝下

あはれつゆはつゆはつゆは  
あはれつゆはつゆはつゆは

家集のつゆは

後頼朝下

あはれつゆはつゆはつゆは  
あはれつゆはつゆはつゆは



ふ赤鳴

糸議おわ

あまのく棚の末や丹鳴乃  
名一しきうめて代をいおん

建と幸取つれ子きくあ あ中納言雅玄

代ととくもの、わくくの竹鳴乃

梅一と進くくく驚れあ

糸集現なえうーま下摺入若 後二位行家

高鳴乃まはとくくともく舞

あけわくくくああありのうせ

糸集月玉つーま 紀伊 後九条内大臣

玉津鳴んくあ代乃あらり

あまあをりと月わたらん

後九条の鳴乃 為家

あーらたゆとあーいあ海り

代とくくくあああああ

糸集七月九日 源義昌

玉津鳴いりののくくああ

あまのくくくああああ



玉津島音之文 春月

右兵衛督なるが

玉津島にせいの松れりるも  
にほりしとて春の月の  
はらとて

玉津島入の山松といふも  
あまのつらさなりとも

日方の

人丸

玉津島しうのうらまのまゝいあま  
よりひるゆか妹とされん

建保三年の春 後成如

あらと梅の田舎の鳥のまゝ  
りあがりしとて

千名そと

慈法和尚

誰かこころに誰波の塩れりるよ  
田舎の鳥れりるなり

建保三年の春

順法院の製

あまの田舎の鳥れりるなり  
さうしてわれぬあまのまゝ







あまのりかのもねり  
文藝をひるきつるこれま 権僧正の

ゆいしつ浪のわきまをうの

ふいそんまてふりさるの

るそりまてふりさるの

垣あまのゆきまてふり

ふりまてふりまてふり

康平四年日誌の記述あり

朝にふりまてふりまてふり

ふりまてふりまてふり

津奥

白毛のゆきまてふり

ふりまてふりまてふり

ふりまてふりまてふり

ふりまてふりまてふり

ふりまてふりまてふり

日方ふりまてふりまてふり

我命ふりまてふりまてふり



神さひく又あ葉はとま

家集いの 梅橋屋

信実宛下

身もろ井るのどりここの時

月をそらんつる宿はざくして

さしらのゆゑは ひとへ

下はわなれハ時りまあり

らひありま今こそいれ

此の中を葉

隆緒宛下

また志り 烟の下よなうら

家の屋 ひとすま

〜

後惠法師

家の浦れまのまのまのま

わまられをいふ人

か葉はかきうのまは 梅橋屋 又信実 氏戸の家

波をぬまの梢とまらる

あちつむるれうのまのま

葉はま

中務の親王福余

後のゆゑはまらるるま



舟のうらものうられし川流

鳥集あまの書

権佐正云

みづとこは極凡をうらまのうら

うらものうら川流あまのうら

建仁寺の老あまのうらまのうら 鳥集 後鳥羽院の御歌

うらまは春の本はけしあま

あまのうら川流あまのうら

鳥集あまの書 うらまのうら川流あまのうら

うらまのうら川流あまのうら

あまのうら川流あまのうら

鳥集あまの書

鳥集あまの書

水白のうら川流あまのうら

鯛のうら川流あまのうら

鳥集あまの書

うらまのうら川流あまのうら

うらまのうら川流あまのうら

鳥集あまの書

詠うらまのうら川流あまのうら







る明の月れうさる梅の松

日

後正行意

梅のつるものほららん

し物寄るしうしうしうの松

部—を懐中おろの<sup>を情</sup>まよる人—

舟よる井さちのつるはらそ

波もゆるそやのしけるらん

室治二年古そのままおね 後漢院に別家

しちうらう東をらんしそ暮るよ乃

燈のつるんをそらるあち人

部—を方ごのしうしう— 赤人

ふいの浦ようらんよのつる

いしうまよみいほちとすし

白芳高き入つるお葉 後の糸肉ち下

お葉こそうじとみおれたるの浦

すゆやとくのつるらん

遊集ち—白幡及伴は或梅のあき法師—

大鴻や遠のほらよしうの



くらさりあつぬこゝろもさか  
建ちかへるそま

まろしと力のうまひすけりか  
神の公よのむらさき

トPの巻

人海や浪まよひくさか  
うしおらして恋まよひ

山某辯格のやまへ 後の桑田の信

天さうもいすつこゝろり

あつたもくも屋をさう

ゆはれ毎三のあま下ろしは後を福津云

人しとさふ公のあうれ  
いそらう一のふ屋をさうの松

長久元年一月良子内親王  
年合う一人のてしにい貝

うひも所

まろし

浦わをわそのさうらむ



ひとりの心をいりていふに非

集まらぬのこころなるをいふに殿

とまよふことと流るるをいふに

ねいあういふあやういふに松

多院合を京新とあやういふに 麻蓮法師

あり小舟の半流にうぶ波はも

いふことと流るるをいふに

いふことと流るるをいふに

かきつらぬのこころなるをいふに

るそいふの

重なる

いふことと流るるをいふに

八十流乃をいふに

いふことと流るるをいふに

日 皇太后文久文久

いふことと流るるをいふに

いふことと流るるをいふに

いふことと流るるをいふに

いふことと流るるをいふに



うらまへてはしるるをくもるん

日懐中  
日

あまの刈刀るるの語は白雲乃

まの語りもあはれなる

弘安元年万葉集後九条内下

千里のて枝さうらとまう海

いしきよのさしあはれい

建保三年の万葉集  
定家

梅らるる公のいしきよ

人まう海れあまのいしきよ

萬葉二年万葉集  
常盤井入道公

まじの語もあまのいしきよ

あまのいしきよ

日万葉集  
源後平

あまのいしきよ

いしきよ

六帖集  
権信正公朝

いしきよ















町毎に〜とて〜  
わたり

山七を平ちそ海路

塩風よるる〜  
津路

そらひ〜  
舟人

〜  
舟人

あ〜  
津路

〜  
津路

日懐中

日

津路 鳴 恒 津 ぞ〜  
舟の

よ〜  
舟

日百三

人丸

すみ 名 の〜  
津路

〜  
津路

日百三ありり〜  
赤人

じこ 舟 浦 ぞ〜  
舟

う〜  
舟

日百七

よみ人〜

あ〜  
舟



あはれなるはなはたしきものぞいかにうらや

花集 漢も(る)あ

重く

もつふやその舟られたるを  
いへるはつあつれは海に

ふは年(の)社(を)事

後成

杖身よじこる浪らもん後を  
かのうよむりねあこの

あまの

あまの

むちのくま(の)あはれなるはなはたしきものぞいかにうらや

あつしきうしあよみつ朝  
あはれなるはなはたしきものぞいかにうらや  
あはれなるはなはたしきものぞいかにうらや

あはれなるはなはたしきものぞいかにうらや

光後部

あはれなるはなはたしきものぞいかにうらや  
あはれなるはなはたしきものぞいかにうらや  
あはれなるはなはたしきものぞいかにうらや

あはれなるはなはたしきものぞいかにうらや  
あはれなるはなはたしきものぞいかにうらや  
あはれなるはなはたしきものぞいかにうらや







弘治二年中勢心親王の御威

夕さきくはとみ新の清よりく

あうそうみらよ恒やうん

清心様平清親を中記人丸

ゆるかりささの清れあふ

んりてしれ浪のよのま

部あまのつとむち物玄大伴

わまららの清の清をり

しらの小清たよりわ

権信の巻

わまららの清の清をり

ちえのりりる浪りわ

寛元年平清盛を正之信之巻

り末乃公清の清をり

さし乃小清をり

つらね清をり

さし乃公清の清をり

り末乃公清の清をり



室治二年三月三日 舟内侍

心あつしきくなくよあらしむる花

うらみのいづのあけのりあけ

うらむも懐中 小舟

とらりあけのり小舟のうらむ

都れはとくにともさうともあ

家集秋三 家隆

とらりあけのり小舟のうらむ

たらり 小舟りあけともあ

とらりあけのり小舟のうらむ

あけのり 小舟りあけともあ

うらむのり 小舟りあけともあ

たのりあけのり小舟のうらむ

心とあけのり小舟のうらむ

弘治元年 中務卿 権徳云

別海よみあけのり小舟のうらむ

都れはとくにともさうともあ

家集秋三 舟内侍



いづ海の浦よんちのみ舟を  
神れんゆきいこきあたるか

家集

庭に

うこのまに相さかして舟鳴  
神のさ海つらよこまをうん

きう鳴とふすくそ後松節下

松節

よるまをみくくろ鳴よこりこ

せの川らよ平向てそあら

家集  
松節又瓶が紫式部

夕霧のさ鳴くれしよのれ

松とらんるあせくぬくか

此平らまむく成りしるのた

われこしてつらけさよの

よまてしよあひこ

現る六  
心之位知家

あ、ぬれゆらよまらるる鳴をけ

みーまうまうこけぬつれ

家集  
まき  
重く



いゝ梅よわさく夜ふあうなり  
様みの清れらふやうす  
日よのきぬあか

なやこくちの清くさうけ  
麻子まきさうもはんとまきる

はしりしき前世のうきよ  
言渡 信 三位親政

わささみさうさうさうとんはな  
おれりうさうさうはらへ

推中納言せ方

うもさうさうさうさうさう  
あしりしきうきよ

ふゆえきしきうきよ  
為家

うすくさうさうさうさう  
らしりしきうきよ

あつみ屋はなすうきよ  
系儀雅也

あつみのさくらの清風吹ぬ  
え清のさくさうさう

日  
急須和尙







あまのついでに  
すゝめくろくわ

出懐万葉

後頼朝下

すゝめくろくわ  
あまのついでに  
すゝめくろくわ

澳

鳥集のすゝめくろくわ

松多院入る二京親王

あまのついでに  
すゝめくろくわ  
あまのついでに  
すゝめくろくわ

松多院入る二京親王  
松多院入る二京親王

あまのついでに  
すゝめくろくわ  
あまのついでに  
すゝめくろくわ

日  
松多院入る二京親王

あまのついでに  
すゝめくろくわ  
あまのついでに  
すゝめくろくわ

松多院入る二京親王  
松多院入る二京親王

あまのついでに  
すゝめくろくわ  
あまのついでに  
すゝめくろくわ



千尋者奇人

志家

是の秋のこゝろのうらみ

かけぬきとほの月け

堀川院寄る

権中納言時

ふとふく浦つらみとて舟

沖のなつとらむとてな

葉月寄る

ふらぬらぬのなつとらむ

あつとらむとてな

後鳥羽院御製

難波のやあつとらむ

奥の奥のなつとらむ

権信卿下

物るなつとらむの奥のなつとらむ

なつとらむのなつとらむ

建仁二年

志の沖やうらむとてな

浪よりうらむとてな



室戸二年一りも海邊のしづみのみち **あはれ物さむら**

清くはれもくうれはつが原かみ

みよのねさし **あみまのり** ぢぢわ

海川流るるさか **指さ物さむら**

風くわれはさる極さいあはれ物

いさよし **さし** この海まで

速にそよ **さし** 潮と流る **後る** 相傳は別表

ふれ浦や湖 **つる** 奥よ **さし** ありて

秋と勝 **の** あり **あり** 月

室戸二年一りも海邊のしづみのみち **あはれ物さむら**

白か **の** ひれ **さる** 奥 **さむら** の **さむら**

いさ **の** よ **さし** は **さる** 舟人

日さ **の** **さむら** **家** **澄**

あはれ **物** **さむら** **あ** **は** **れ** **物** **さむら**

二尺 **の** **さむら** **あ** **は** **れ** **物** **さむら**

日さ **の** **さむら** **後** **さ** **むら** **澄**

あは **れ** **物** **さむら** **あ** **は** **れ** **物** **さむら**

た **さ** **むら** **の** **さ** **むら** **澄**



旧後拾遺家集を詠むことありき 家 定家

雲のりこい回れはまやうき人  
やうけあはるあまのしりた

建保三年四月下あるそ日月 家隆

秋少き玉ののぼるのうき梅  
人こりくり月をかんらん

山集はる六ふいのそき拾遺 後九条田下

新しけ都波のそきれあきは  
くこころかんめ春のうき

家集ちりよのそき

後拾遺

まこみ浦のなむるに新しき  
いりにやむるのそきいこらん

家集ちりよのそき 家 定家

我恋るそき 家 定家

を奇中一集文ありき 家 定家  
いしり入垣き 家 定家

高師のたき色あれま



此夕院入在二京親皇女平基 **源師光**

もくくとつゝ名の奥をとうくみれ  
やそしむとまよふをきこさしり

建保三年の事 よしの橋 **定家**

もくくたつゆふれむきの友舟の  
ゆきこころをあらせゆきあ

永安二年底回社有人 よしの橋 **按察使公通**

朝ほくもあやの奥をりみの  
よきよきあはくものわきとをかん

家集 **西行上人**

浪をいあやの奥をりみの  
こころてきよすきんをさる

永久四年 源が **源兼昌**

うれあや 源が **源兼昌**

家集百代 源が **家隆**

ふの目あわさくまらぬ人の  
かたりぬ奥一凡むふあ







宋后万寿寺

光俊卿

ししは海も東のむらし

列らん入江のふれあとも

月とそめらぬまきのうら

六帖題彩六二

為家

舟さし。秋の入江の月ひ

光あまうともちるうら

大井川に舟入江松年より 花山院少副家

かゆん山よしこりうらむのえ

去のうらり。りく世危る記と

中集秋二

後京極持政

ああまきい少の入江舟を

山路秋るる雲れけり

後京極

家隆

山への入江れあやうら

月とそめらぬまきのうら

中集

右兵衛基成

八月由り舟てのうらそれ水



入江のほとりさしゆくあけくえ  
寛文三年の如く入内屏凡 **お中納言定家**

しんくろそ結一治江のあやの草  
くふくろそあやの草

大集百首花為歌中一也春は江の

春の光入江のほとりさしゆく  
都もあけく花やらさるん

新ら歌万十一

あけくろそあやの草

あけくろそあやの草

大集百首花為歌中一也春は江の

あけくろそあやの草

あけくろそあやの草

糸儀おね

あけくろそあやの草

あけくろそあやの草

大集百首花為歌中一也春は江の

あけくろそあやの草







ひくれくいはるまつ舟か

歌集三の巻

定家

玉鳴の蛭のようけりて

月をまよりの流のとれ月

歌

中交控す家原

鴨の井の難波蛭の月をて

あやのあしりてもくれと

舟中を信ふまよりの流は 紫金山と入道二のあ

流はくみらまはらちこのえり

船中の舞よるふくれと

歌集三の巻

光俊卿下

かきうふの山登の古のえりて

まよりのあしりてまのたて

建保三年八月五日 後成女

人あまに美あれとわりの海

入のりてぬまよりの

歌集三の巻

紫金山と入道二

後凡あまのたてりて



和国の入にりりくる月をけ

和国の入にり

右に國を

まの海のもの後ののゆきよ

さくらよをらる新乃や海風

和後橋段のそよみの入にり 家長の信

柳か——くうこの入にれをま

わをれいあをから人のうそ

和後橋段のそよみの入にり 和後法師

湖てるやよみの入にのまをれ

月よりりりり書風をく

和後橋段のそよみの入にり 和後法師

たきり風かしの細いのあまの

いさるものいさるものいさるもの

右に國を

ゆきりなみの川のゆえの浦を

風を吹かすよやうあまの人

和後橋段のそよみの入にり 家長の信

月よりりりり書風をく



この日の秋、まはる月をらん

室津二のそはきんあつちには  
清興 知家

岸のふれあはるあまのねいあはる

玉つらりゆしじうあそあはる

玉のねいあはるあまのねいあはる  
中納言

みまこちよこさ舟あそあはるあはる

玉あはるあはるあはるあはる

寛治のそはきんあつちには  
源仲伸

玉のねいあはるあまのねいあはる

末のそはきんあつちには  
あまのねいあはるあまのねいあはる

あまのねいあはるあまのねいあはる  
後鳥羽院

あまのねいあはるあまのねいあはる

あまのねいあはるあまのねいあはる

あまのねいあはるあまのねいあはる  
後鳥羽院

鴨の井の玉のあまのねいあはる

あまのねいあはるあまのねいあはる

あまのねいあはるあまのねいあはる  
赤人

風吹の流いあはるあまのねいあはる



津田の御印はうらうらとせり

六十五

中務卿

さしく吹津田此細江の塩凡

鳴さちとわうらうらとせり

友方中一初除宣

殿留門院

舟もすう津田の御印はうらうらとせり

ともも津田の御印はうらうらとせり

五十二

右大臣

ほ小出さう津田の御印はうらうらとせり

津田乃細えの草くれり

五十三

小侍

五月由れり津田の御印はうらうらとせり

津田の御印はうらうらとせり

五十四  
と久二年の月康申津田の御印はうらうらとせり

はくまえの玉江の津田の御印はうらうらとせり

つわの津田の御印はうらうらとせり

五十五

意旨法師

はくまえの津田の御印はうらうらとせり







常々いふよるむらさきのつらさるる

高祖の御代に流し侍り 光俊卿下

懐心ふよりのきりぎりすのうらみ

けしきにのりてあはれ侍舟

弘治元年信長公の御代 信実卿下

夜ひそよほのほろほろとさるる

こほろぬしらの目ねとさるる

弘治元年信長公の御代 良蓮法師

わすめのわらにれきよあまのこ

あまのこは舟はさくさく

日向守の御代 大納言大伴

草のいの入はあまのあまの

あまのこはあまのこ

弘治元年信長公の御代 権僧正公朝

草のいの入はれきよあまのこ

有ともあまのこあまのこ

万葉集の巻の八にあり 権僧正

あまのこはあまのこ



秋風をりかるとし物ぞいんてらする  
秋風の入はるる

為家

秋風の入はれ清く一海より

尾葉もつくぬの浦ぞ

新三上人

平心道人

あきわらるる海の入はるる月を

鴨が水もあはれはちちちち

秋風をりかるとし物ぞいんてらする  
秋風の入はるる

赤人

あきわらるる海の入はるる月を

あきわらるる海の入はるる月を

千代

為家

あきわらるる海の入はるる月を

あきわらるる海の入はるる月を

百々

為家

あきわらるる海の入はるる月を

あきわらるる海の入はるる月を

去秋

月

あきわらるる海の入はるる月を







うなむやうんの入をみそ  
旅人よふらぬのほそみち

雑言中 宗室の之冊は 抄録 よし人

まふりたるもあしあしの  
声も残るもあのをさるみ

堀川院御百首 うに抄録 又残中 公家

うしあの人のかとんまに  
入のさしよひちかきみち

雑言中 よし人

之清ののこしよんまむ  
夫のくちもいよまのよそま

家集

伊勢物語

折るゆき声れうりよん  
うれりなをさうのうま

定元言自日台社交に有由 光俊御下

之清は遠乃川流のあこ  
うのこもみせぬ五月あ

部

よし人



之鳴の北入江乃こちをとりよせ  
我とていささか中ひありし

貞應三年万葉集

為家

みまのわさこのあこもつて  
しんがしつとむらうとあま

貞應三年六月万葉集

月

三鳴のわさこのあこもつて  
しんがしつとむらうとあま

貞應三年

上四門四割衣

三鳴のわさこのあこもつて

かろとていささか中ひありし

建保三年万葉集

順徳院御製

之鳴のわさこのあこもつて  
しんがしつとむらうとあま

寛元元年万葉集

為家

かろとていささか中ひありし  
人をもよおぬかりぬのこ

貞應三年万葉集

あつちのわさこのあこもつて



妹よりいふわいよひのしる

日向工止まの入に地は  
下伝又を同

あらのまじすまの入にのまげ書

我もまじすまの入にのまげ書

日向も 日向

あらのまじすまの入にのまげ書

あかひまじすまの入にのまげ書

後連法師

みこまじすまの入にのまげ書

~~~~~やんよ~~~~~

後鳥羽院御衣

あやめがすまの入にのまげ書

あやめがすまの入にのまげ書

千尋書すまの入に地は  
お水門田下

日向のまじすまの入にのまげ書

日向のまじすまの入にのまげ書

万尋書すまの  
後三傳り書

すまのまじすまの入にのまげ書



うふ木葉やあまのつりみ

位在社万々

慈徳和尙

位の位れあうきあうきとあま

あまの道とらんする江の

文集万々もあまの地まはる

夕の夕みうきあまのえま

文集 位の位れあうきあまの地まはる

池

文集

衣笠田舎

山川の水れ落あまをきく池乃

と成さつみあまのくま柳

文集 位在社万々

後の糸田下

きく位のこ深のくまを流りて

笑らる池のあまのじつさ免

文集 位在社万々

為家

山の毛乃りあまのきく池の

入るりや我免るるかん

文集 位在社万々

信実下



道のりたつてなまじいころに  
あつた池のちりちり

日 一 日

あつた池のちりちり  
あつた池のちりちり

あつた池のちりちり

あつた池のちりちり  
あつた池のちりちり

あつた池のちりちり

あつた池のちりちり  
あつた池のちりちり

あつた池のちりちり

あつた池のちりちり  
あつた池のちりちり

あつた池のちりちり

あつた池のちりちり  
あつた池のちりちり

あつた池のちりちり



ついでにのまよのみにわかれの記に  
よの池乃増れしむらぬをこそ  
のえよみつえき

弘安二年三月廿日

本町門院日記

そののりな池乃のまよをうまらる  
神のちこもあ代ののけ

又弘安二年三月廿日

光後日記

かこぶれま風さかくまをそと  
流もそあなをいけのいなり

池乃の池乃

よみ人

あひなりのまよをいれれ池乃れ  
人よねわなまよをそまらる

弘安二年三月廿日

光後日記

らそてし。人あらしまらふこと  
いこの池乃いひそねえ

百三十八年三月廿日

法京定家

いささるむらのも風吹あじ  
ちの池よあまらる流



定家

あめりし生田れもりの本うしよ  
池のさるよきしうらるるしう

俊成女

うらるる生田れ池よ月けと  
もりの秋凡うけよけと

後三位花宗

あつ生田の池しむとけ  
池より秋うあもと記り

藤原康光

月やとる生田れ池の芦れあよ  
あもあつあもあよの凡飛

為家

あなわ生田れ池れあやのさ  
いづるるぶよのねあもん

あめりし生田れ池れあよのさ

あめりし生田れ池れあよのさ

あめりし生田れ池れあよのさ



日まほしの池の地

月

うまきふもふれたもくまきふ  
そあゆみ林の池の

そあゆみ林の池の 智燈法師

冬深まの池つとあありと

あ乃うく見ぬくそああり

あゆみまほしの池の

あゆみまほしの池の

あゆみまほしの池の

日まほしの池の地

月

あゆみまほしの池の

あゆみまほしの池の

あゆみまほしの池の

あゆみまほしの池の

あゆみまほしの池の

あゆみまほしの池の 仲実朝臣

あゆみまほしの池の

あゆみまほしの池の



その中一類拾捌理名六

梅則底 水亭初巻

さうの池れつちの水落うつきて  
うもらとあらしを歩そあわら

依月三枚

後抄下

原乃池の岸まよるる月け

列一秋のこらみぢり

室名二年すきし

信実下

いほけりう氷さらうれおの

をりあつくくもれ池も

因果大書一巻よわいの池梅大義心證教

はーのてやの年れをとうり

ふあいの池りらふれき柳

影一うとをたらしその池あふみ人

あしとく公りそみ乃き

の下のれき

日百十ころの池き月

妹、あやうありの池は

あやうありの池は



その中一は

正三位季禮

とくくくくくくくくくくくくくくくく

この池はさきくくあー鴨

洞窟にありたるさきくくの家

池大和

くくくくくくくくくくくくくくくく

ぬくくくくくくくくくくく

ぬくくくくくくくくくくく

ぬくくくくくくくくくくく

ぬくくくくくくくくくくく

此のくくくくくくくくくくく

麻鳩社つる次まめくく

くくくくくくくくくくく

のくくくくくくくくくくく

代はくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく

服する若不老くくくくく

くくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく







うい毛いゆりどくろ新報

新報新六くくの池もゆ 志道田大君

かろーまのあーちまのむーち

はろちろーちろー人の池

新報新六くくの池もゆ 志道田大君

志道田大君の池

まろも井てと突とそらふ

又久平万そびくくの池産 又久平 大皇太后又服板

水 又久平 井わくくの池よしに

うろくもどざくしてる

謙徳云

たもふちくろくもどし花咲

くくの池くろくもどし

はれくろくもどし

くくの池くろくもどし

よりくろくもどし

くくの池くろくもどし

くくの池くろくもどし



あはれみの池にまはるる花の  
あはれみの池にまはるる花の

日六二

日

あはれみの池にまはるる花の  
あはれみの池にまはるる花の

日六

日

あはれみの池にまはるる花の  
あはれみの池にまはるる花の

日油中

源道深

あはれみの池にまはるる花の  
あはれみの池にまはるる花の

泉院

歌仲物下

あはれみの池にまはるる花の  
あはれみの池にまはるる花の

日六

好忠

あはれみの池にまはるる花の  
あはれみの池にまはるる花の

あはれみの池にまはるる花の  
あはれみの池にまはるる花の



おのれの岸をわたりまゝの

池のまじりし立のうらみ

十名もなき 具親御下

ふいままの池しうらむしあ

すもよもや君のゆきす

集苑中 後京極持政

らりまじりしうらむのうら

あま池信立しんまのんか

万葉集 意積和造

八月あよりてあつむら

池りか今もたきり

やうちうらみ池大和み橋原公家

いしもやまの池のうら

福のよ川せむし後まね

集苑中 家隆

いしあのみもれ池のわな

かむもさうのうらむ

万葉集 衣笠田原



釣・たわじまひまうあか白糸乃  
ゆるりのけい井もあ

三つあまの池東御

比多院通京親王

み月あまの川長舟出

池のまのの

と打の池西御 和泉式部

うのあか(い)あま

しあまあま

あまの池東御

おみ人

いりあまの池乃

いあまの火のりあま

家集の池東御

六条院宣旨

あまの池乃

あまの池乃

家集の池東御

結道部下

人あまの池乃

あまの池乃

あまの池乃







おもむくはのしげをうらめて

しげを懐中するは地蔵のしげをうらめて

あいたせよのむらさきとてあれ

しげを懐中するは地蔵のしげをうらめて

遠くをうらめてしげを懐中するは地蔵のしげをうらめて  
しげを懐中するは地蔵のしげをうらめて  
しげを懐中するは地蔵のしげをうらめて

風吹くうらみの池は入るかむ

うらみの池は入るかむ

仰せ給はるるうらみの池は入るかむ

水あはれうらみの池は入るかむ

うらむるかむうらむるかむ

うらむるかむうらむるかむ

あはれうらむるかむうらむるかむ

うらむるかむうらむるかむ

うらむるかむうらむるかむ

あはれのうらむるかむうらむるかむ

うらむるかむうらむるかむ

うらむるかむうらむるかむ

うらむるかむうらむるかむ



りさるる——ねねわまらひね  
善とらぬの池に藏 種金者人言

久保の池乃水あふまきりて  
なすのそいおとらるる 雲やとらん

建保二年の裏より 藤原康光

大沢の池のまもりえりて  
りりりさくさくわらぬの池

部——を 俊成

たみりとも人あつしむらひ

とさくのしげとむらわられ

文永二年白河のさきさきの池 光俊 御下

そのゆえさうさの池にすじと

慈しそ 終のまもりもいづれ

部——をさすまの池 俊成 人丸

海の池のこすけをさねよねと

人のまもりもいづれいづれの

部——を 俊成 御下

おもすさすまの池 藤原康光



池の汀とありては

日

日

まの池よありては

しるもあはれ

弘治元年一月

後九条内大臣

海の池のつらき

まらありては

大徳二年一月

良一法師

冬海とありては

汀のありては

建治二年一月

後三位花宗

まの池のつらき

まらありては

貞治二年一月

為家

あつれはありては

しるもあはれ

堀河院ありては

源仲躬

蓮代ありては



まよふのしづのうらみよそそく  
きぬきぬの池をね

あつみの池のついでに

こちくこちくふみふみ

部  
しづと懐中しづの池

あつみの池のついでに

あつみの池のついでに

池上池月の池

指中納言

生駒のついでに

あつみの池のついでに

室二年

中三親王

あつみの池のついでに

あつみの池のついでに

あつみの池

あつみの池

あつみの池のついでに

あつみの池のついでに

あつみの池

あつみの池

秋風よ吹きよきよきよ











あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

諸奉

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

位

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

神

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

好

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

武

あまのついでに







ある池ありて人々をくらす

康平四年三月秋の雨に池ありて泉式部

けり少くもありけりまよひたる

池の玉もくまひりて

小待後

春の少くもありけり

池のけりもあはれなり

再作

ふりてありて池あり

人をもあはれけり

六万番ありて池ありて中へあはれけり

底の池ありて

音のありて

再作

月ありて

春のありて

二条院

み月ありて



けろそりさひらさりのつけ

光孝天皇入京詔を記し藤原家を誅す  
池火も 如法師

池火も 繁吹風は梢よ音もそそ

ささよらあさひらさりのつけ

光孝天皇入京詔を記す 大藏卿有家

月をとも公をたねひらさりの

むらりの杖杖也ふらさる

光孝二年入京詔を記す 為朝

いよふゆふのさしをそそ

にゆけうふ底はらつけ

光孝二年入京詔を記す 重光

底はの池よりさる

ささく風のささけらる

光孝二年入京詔を記す 藤原孝家

凡吹くささひらさりのつけ

月を成りひらさりのつけ

光孝二年入京詔を記す 藤原有家

よめする月のうらさりのつけ



あつたよすあねひらきぬ池

貞應二年 尚存るそ處 若菜 曰

底とよやうう東も白く

あつたよすあねひらきぬ池

池のき 曰

廣さなやうう東も白く

あつたよすあねひらきぬ池

月陽をよそ下るる時 若菜の池 月陽

あつたよすあねひらきぬ池

こころ梅く月よあつたよすあねひらきぬ池

あつたよすあねひらきぬ池

あつたよすあねひらきぬ池

あつたよすあねひらきぬ池

あつたよすあねひらきぬ池

あつたよすあねひらきぬ池

あつたよすあねひらきぬ池

あつたよすあねひらきぬ池

あつたよすあねひらきぬ池



正徳二年一萬石

武子田親王

あつとんがすゝいの池のむら

あつとんがすゝいの池のむら

あつとんがすゝいの池のむら あつとんがすゝいの池のむら 勝命法師

あつとんがすゝいの池のむら

あつとんがすゝいの池のむら

檀中納言師時

あつとんがすゝいの池のむら

すゝいの池乃あつとんが

千石萬石

前大納言兼家

あつとんがすゝいの池のむら

あつとんがすゝいの池のむら

あつとんがすゝいの池のむら あつとんがすゝいの池のむら 為家

あつとんがすゝいの池のむら

あつとんがすゝいの池のむら

あつとんがすゝいの池のむら

右原為家

あつとんがすゝいの池のむら



しとくはなれるる秋のうらみ

任者紅河乃そまの口の地 急須和尙

あけをよみ松の尾よみ

秋をうらむ任のしん

同 月

當の秋すみのえとの

波まれ月よ公を海に

月

み月ゆれはすみの



海より池より白波





Faint, illegible text on the left page of an open book. The text is mostly obscured by bleed-through from the reverse side.

Faint, illegible text on the right page of an open book. A rectangular red seal is visible in the upper right quadrant of the page.





